中学校部会会報

全日本音楽教育研究会

令和８年２月１日発行　通算第８９号

佐賀大会を終えて

全日本音楽教育研究会全国大会佐賀大会　大会会長　副島 和久（佐賀市立金立小学校）

10月22日（木）・23日（金）に開催いたしました全日本音楽教育研究会全国大会佐賀大会は、天候にも恵まれ、全国各地から約850名の皆様に参加していただきました。おかげさまで多くの成果を上げ、盛会の内に会を終えることができました。ご参加いただきました皆様に心からの感謝を申し上げます。

さて、本研究大会は、大会研究主題「育てよう　音楽と豊かに関わる子ども」の下、「授業研究に特化した大会」と銘打って、中学校では４授業を公開し、その後の研究協議についても、90分の時間を確保し、ご参加いただいた皆様からのご質問やご意見をしっかりとお伺いするとともに、本県で取り組んできた研究についてもお伝えできるようにしました。また、中学校では 臼井 学 先生と 佐藤 太一 先生に指導助言をお願いし、これまで佐賀で取り組んできた授業研究についての適正な評価や価値付けをしていただくようにしました。また、本研究大会では、校種別研究主題は置かずに、小学校から高等学校までが、「育てよう　音楽と豊かに関わる子ども」という主題の実現に向けて、その方向性を一としながら取り組んできました。その実現の手立てとして副主題の「音楽科及び芸術科音楽における『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善と『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を通して」行うこととし、現行学習指導要領で求められていることを着実に授業に落とし込んでいくことで、生徒にとって意味のある授業、身に付けさせたい力を確かに身に付けることができる授業となるように不断の見直しを図り、授業改善に取り組んできた次第です。ご参加いただきました皆様が、本研究大会を通じてその一端でも感じ取っていただけたのでしたら、大会会長として、この上ない幸せであります。

大会１日目の午後は、６つのワークショップにおいて、それぞれに専門性高く、また、個性あふれる研修を行うことができ、ご参加いただきました皆様におかれましても、それぞれに学び多き時間となったのではないかと思っています。

大会２日目の全体会では、文部科学省 初等中等教育局 視学官の 志民 一成 様と教育課程課 教科調査官の 河合 紳和 様より指導講評をいただきました。その中で、次期学習指導要領の改訂に向けての動きが本格化してきたこの時期に、現行学習指導要領の趣旨を再確認し、学習指導要領に基づいた授業づくりを深化させようと取り組んだ佐賀大会の意義や、その中で「指導と評価の一体化」を図る学習評価の充実に向けた研究実践と、各授業者を支える授業研究チームの強力なサポート体制についてのご評価をいただけましたことは、これからも続く佐賀の先生方の研究実践の大きな励みとなります。

記念演奏では、古澤 巖 氏のヴァイオリンと金益 研二 氏のピアノによる素晴らしい演奏に魅了され、暫し研究大会であることも忘れて音楽に浸ることができました。そして、最後の全員合唱では、合唱作曲家 弓削田 健介 氏が能登復興支援のために作曲した「フェニックス」を会場の皆さんと一緒に歌い、音楽のもつ力、音楽が人と人とをつなぐことができることの素晴らしさを実感することができました。弓削田 健介 氏が、この全日音研佐賀大会に向けて全国４７都道府県の先生方を巡り、「一緒にフェニックスを歌いましょう」「佐賀で会いましょう」とメッセージを発信してくれたことは本当に感謝の念に堪えません。

こうして、日々の音楽科授業の積み重ねが「音楽と豊かに関わる子ども」を育成する源であることを再確認し、音楽科教育の大切さを改めて実感することができた大会となったのではないかと自負しています。

最後に、本研究大会の開催にあたり、ご指導・ご助言を賜りました文部科学省、文化庁、各教育委員会等、関係諸機関の皆様、そして、本研究大会に関わってくださいました全ての皆様に深く感謝申し上げますとともに次回、奈良大会の成功をお祈りいたします。

大会終了後も HP 更新中です。アドレスは　https://saga-ken-on-ken.jimdosite.com/　です。右上の二次元コードからも見ることができます。ぜひ、ご覧ください。

Contents

Ｐ１　佐賀大会を終えて　佐賀大会　会長　副島 和久
Ｐ２　奈良大会に向けて　奈良県中学校部会会長　奈加晃典
Ｐ３～４　佐賀大会講評
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部　教育課程調査官
文化庁参事官（芸術文化担当）付教科調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課　教科調査官　河合　紳和 氏
Ｐ５～８　佐賀大会《中学校部会》公開授業・ワークショップレポート
Ｐ８　佐賀大会 記念演奏　Information

発　行
全日本音楽教育研究会 中学校部会

東京都国分寺市並木町２丁目１５
国分寺市立第五中学校内
部会長　野口　大介

令和８年度全日本音楽教育研究会全国大会奈良大会

「音楽で培おう　シンの力（心・伸・信・深→真の力）」

中学校テーマ

「信じよう音楽の力、奏でよう仲間と共に！」
～音楽的な見方、考え方を働かせて～

奈良県中学校部会会長　奈加晃典（五條市立五條西中学校校長）

１．大会研究主題と研究概要について

令和８年１０月２９日（木）３０日（金）に開催させていただきます。全日本音楽教育研究会全国大会奈良大会に向け、上記の大会研究主題や、各校種の研究テーマを掲げ研究を進めているところです。本県では令和２年度に、第６２回近畿音楽教育研究大会を開催する予定ではありましたが、全国的な新型コロナウイルス感染症の蔓延により、紙面発表となってしまいました。しかし、試行錯誤しながら、「協働学習」の活性化の方法を継続、発展させ、本大会に向けて研究を深めることができました。

中教審答申では「感性」は創造性の根幹をなすものであり、芸術系教科が子どもたちの創造性を育むうえで大切な役割を担っていると示されています。生徒たちは「音楽」のもつ美しさやすばらしさを豊かな「感性」で受けとめ、様々なインスピレーションを得ることで、将来につながる創造性を養っていると考え、本県としては、全国の継続研究の視点３項目を視野に入れながら、下の三つの視点を柱にし、研究を進めてきました。

①「自ら問いをもち、共に探求する授業づくり」

授業デザインを吟味し、効果的なグループ学習の機会を設け、言語活動に終始するのではなく、「音」や「音楽」を通しての学習を積み重ねることにより、仲間の思いや意図を共有することができ、個々の学びも一層深まると考える。むろん対話的学習はグループ学習だけではなく、教師と生徒との心の通い合う対話や、作詞者や作曲者の思いをくみ取る事も対話の一種として捉え、教師の発問のタイミングや内容の方法等の工夫を重ねました。

②「音楽を通して人・社会・文化をつなぐ力の育成」

生活の中に存在する多様な音に気づき、その必要性や意味を考えることで視野が広がり、生活の質の向上につながる。伝統芸能に身近に触れることができる「奈良」という土地柄を活かし、地域に根ざした学習をすることが比較的容易であり、ふれあいを大切にしながら学習を進めました。

③「学びの過程を大切にした指導と評価の一体化」

カリキュラム・マネジメントの元に、単元の評価規準を作成し、指導目標を立てて授業を展開し、評価を行いました。その評価の状況や生徒の実情に応じて PDCA サイクルを実践しました。

２．大会概要

本大会は先行チラシにもありますように、なら１００年会館を全体会場とし、各校種それぞれの場所において、幼稚園部会で１園、小学校部会で６校、中学校部会で３校、高等学校部会で１校の公開授業を行います。１日目の午前中は公開授業と研究協議、午後からは４つのワークショップを開講します。

２日目は全体会として、研究概要の発表後、文部科学省の志民一成視学官と河合紳和調査官から指導講評をいただき、各校種の研究演奏を行います。

また、１日目の夜にはレセプションも開催したいと考えております。

ぜひ、来年は「古都奈良」にお越しいただき、全国の先生方から忌憚のないご意見をいただき、共に学びを共有できればと考えております。

何卒よろしくお願いいたします。

◆講評◆

国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官
文化庁 参事官（芸術文化担当）付 教科調査官
文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官　　河合　紳和 氏
日 時 ： 令和7年１０月２４日（金）　１０：００～
会 場 ： 佐賀市文化会館

小学校部会の指導講評に続きまして、私からは中学校部会及び高等学校部会についてお話しさせていただきます。

昨日の公開授業では、授業者の先生方が緊張しながらも堂々と、自信に満ちてのびのびと授業をされておられることを頼もしく感じながら拝見させていただきました。授業者と決まって以来、題材構想、教材の選択、学習指導案の作成、ワークシートや授業資料等の作成など、ご多忙なお時間をやりくりして、考え、悩み、苦しみ、試行錯誤を繰り返しながら授業づくりに取り組まれてきたことと思います。その過程では、厳しい意見や助言に、落ち込んだり、凹んだりすることもあったのではないかと想像いたします。それらを謙虚に受け止め、子供たちの資質・能力を育む授業づくりに、真剣に、真摯に打ち込まれてこられたこと、それが、先生方の堂々とした、自信に満ちた姿につながっていたのだと確信いたします。

個々の授業につきましては、各研究協議の中で熱心な議論が行われ、各助言者の先生方より的確かつ温かいご助言をいただいたことと思いますので、私の方からは、各授業に関連して、ご参観の先生方が今日の授業を参考に、ご自身の実践として取り入れる際にご留意いただきたいこと等についてお話しさせていただきます。

中学校部会では、佐賀市立金泉中学校及び佐賀市立城北中学校の２つの会場で「歌唱」、「器楽」、「創作」、「鑑賞」の計４つの公開授業及び研究協議が行われました。以下、大会冊子の掲載順にお伝えいたします。

佐賀市立金泉中学校・瀬戸先生による、第２学年「歌唱：曲にふさわしい表現を創意工夫して混声三部合唱で歌おう」の授業では、合唱曲「空は今」のテクスチュアに着目し、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する題材を構想しました。

私が参観させていただいた場面では、生徒が曲の最後の部分に焦点を当て、パート同士の関わり方やそれぞれの役割を考えながら、何度も声に出して試しながら、より立体感のある表現にしていく学習に取り組んでいました。

表現を工夫する部分を、先生が「ここ」と決めるのではなく、生徒たち自身が考えて絞り込んだところが素晴らしいと感じました。「この曲のクライマックスはどこだろう？」、「どうしてその部分だと思ったのかな？」、「他の部分との共通点はどんなところだろう？」、「この部分にしかない特徴は？」というように、曲全体から部分へと視点を絞ることは、曲想と音楽の構造との関わりを理解する「知識」の習得にも直接繋がっていきます。

合唱の授業では、例えば「「空は今」を教えるならテクスチュアに着目させなくては！」というように「教材ベース」の授業づくりになりがちなので注意が必要です。生徒の実態を踏まえ、いま生徒に必要なのは「テクスチュア」に着目した表現の工夫なのか、それよりもまずは「音色」を整えて、美しい響きをつくることが課題なのか…という視点で題材計画を立てることが大切です。現行の学習指導要領では「カリキュラム・マネジメント」の充実を図ることを示していますが、まずは「教材ベース」ではなく、生徒に育成を目指す「資質・能力」の視点から年間指導計画を見直していただきたいと思います。

佐賀市立思斉中学校・多久島先生による、第２学年「器楽：リコーダーアンサンブルの響きを味わいながら演奏しよう」の授業では、「テクスチュア」に着目し、「フィンランディア賛歌」の各パートの役割を考えながら、響きやバランスの整った、曲にふさわしい器楽表現を創意工夫する題材を構想しました。

私が拝見したのは、生徒が各パートの役割を確認した後、ＡからＣの３つのサンプル演奏を聴き比べ、自分たちが目指す響きのイメージを掴んでいく場面でした。サンプルＡは響きやバランスの整った演奏、Ｂはパートの音量バランスが不揃いな演奏、Ｃではアーティキュレーションが不揃いな演奏をそれぞれ例示していました。実は、サンプルＣは「フツーそんな吹き方はしないでしょ！」という演奏例でしたが、誰にでも分かる「ダメな演奏例」を示すことで、全ての生徒が「これはヘンだ」と判断でき、この小さな成功体験をきっかけにして、目指す演奏について主体的に考え始めていました。

リコーダーの授業では、楽譜にドレミを記入させ、一つ一つ運指を確認して譜読みをしていく授業をしばしば拝見しますが、まずは声に出して音名唱してみるなどの活動を取り入れることによって、音と音のつなげ方や、息の使い方などを同時に身に付けることができるのではないかと思います。

また、本授業で扱った編曲では、「リコーダー１」のパートはずっと主旋律を演奏し、他の２つのパートはずっと主旋律を支える（ハーモニーをつくる）役割をしていますが、例えば、最初の４小節だけでも、役割を交代して演奏してみることで、全ての生徒が、パートの様々な役割に応じた演奏の仕方を身に付けることができるのではないかと思います。

佐賀市立川副中学校・山口先生による、第３学年「鑑賞：私たちが身近に聴き親しんでいる音楽の魅力を探ろう」の授業では、生徒が個々に選んだ「ふだん聴き親しんでいる曲」について、「声や楽器の音色」と「速度」に着目しながらよさや美しさを捉え、自分にとっての意味や価値について考える題材を構想しました。

第１時である本時では、事前にとった生徒のアンケートで人気の高かったミセス・グリーン・アップルの「青と夏」と、あいみょんの「裸の心」の２曲を聴き比べる活動が設定されていました。私が拝見した場面では、山口先生が、口ずさんで聴いている生徒やテンポに合わせて体を動かしている生徒など、生徒の反応をよく観察し、「この曲知っている人？」、「どんな声で歌っていた？」などと、細かい問いを次々と発しながら、個の学びを全体の学びへと広げる授業展開を実現していました。

中学校学習指導要領では、音楽科の目標が「表現や鑑賞の幅広い活動を通して」という書き出しから始まっています。この「幅広い活動」には、扱う教材についても、子供たちが様々な種類の音楽に触れながら、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成していくという趣旨を含んでいると解釈できます。本題材のように、ポピュラー音楽やアニメ音楽、ゲーム音楽などを教材として扱うことに私たちは抵抗感（ひょっとすると「拒否感」でしょうか）を持ちがちですが、子供たちにとっては圧倒的に触れる機会の多いこれらの音楽が、自分にとってどのような意味や価値をもっているかについて考える機会はとても有意義であると考えます。

また、学習指導要領では「音楽のよさや美しさ」という文言を用いていますが、中には「よくない」と感じる生徒「美しくない」と感じる生徒がいるかもしれません。でも、それらもまた、その生徒にとっての「意味や価値」であることに変わりはないと思います。生徒の日常生活の中に溢れるように存在する、様々な音楽が自分にとってそのような価値があるのかを見極め、生徒が主体的、創造的に音楽と関わっていく資質・能力を身に付けていくことが大切だと考えます。

唐津市立厳木中学校・吉村先生による、第１学年「創作：自分が気に入った「佐賀」を旋律で表そう」の授業では、生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素として「旋律」を設定し、自分のお気に入りの「佐賀」の情景や風物などからインスピレーションを得て、音楽アプリを用いて旋律をつくる題材を構想しました。

前時までの学習で、生徒は「ありがとう」、「さようなら」という、使うシーンによってニュアンスが変わる短い言葉に旋律をつける活動に取り組み、順次進行や跳躍進行、上行形や下行形を工夫しながら旋律をつくることによって、心情を表現できることを実感を伴って理解させたり、先生がつくったサンプル作品を提示したりすることで、つくる音楽のイメージだけでなく、実際にどのようにつくるかという手順などを示し、学習の見通しを持たせる工夫をしていました。

近年、音楽アプリ等を活用した創作の授業が急激に増えています。これらは、一見「個別最適な学び」が行われているように見えますが、実は「孤立した学び」になっている事例も散見されます。つくった作品をペアやグループで発表し合いながら感想やアドバイスを伝え合ったり、つくった作品についてプレゼンテーションをし合いながら作品と照らし合わせて相互に評価し合ったりといった、協働的な学びの場面を適切に設定することが重要となります。その際「こんな工夫をしたよ」ということだけではなく「こんな所がうまくいかなかった」、「こんなところで苦労した」といったことも発表し合うといいのではないかと思います。また、先生が創作に行き詰まっている生徒を舞台に乗せ「〇〇さん、いまどんなところで行き詰まっているの？」と聴いた後「ねぇ、みんな、〇〇さんがこういうことで困ってるから、みんなで一緒に考えてあげよう」などと、一人の生徒の課題を全員で解決するような場面を設定するなどの指導の工夫も考えられるでしょう。

（以下、高等学校部会の指導講評については省略）

本大会では、授業者の先生方の熱心な授業研究もさることながら、各授業者を支える授業研究チームの強力なサポート体制も、大きな成果の一つと言えるでしょう。大会終了後も、このようなチームでの研究を継続していただきますことを心よりご期待申し上げます。

本日、この会場には、全国各地から、実践者として、指導的な立場として、また研究者として、音楽教育に真摯に、また情熱をもって携わっておられる多くの先生方が一堂に会しています。

本大会の成果を、皆様お一人お一人が、ご自身の立場に立って捉え、明日からの音楽教育に生かしていただきますことをご期待いたします。また、ご参加の皆様におかれましては、本大会の大会冊子を是非、大切にお持ち帰りいただき、題材構想や指導計画の際の参考になさってください。

最後になりましたが、本大会の公開授業に当たり、様々にご理解ご協力いただきました、関係学校の校長先生はじめ教職員の皆様、保護者の皆様、そして何よりも、慣れない環境の中、日ごろの学習の成果を発揮し、生き生きと音楽活動を楽しむ姿を見せてくれた児童生徒の皆さんに、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

また、重ねてのお礼となりますが、これまで準備を進めてこられた大会会長・副島和久先生をはじめ、佐賀県の全ての実行委員の皆様、授業者の先生方に心より敬意を表するとともに、厚くお礼申し上げます。

本大会のご成功をお祝い申し上げますとともに、ご参会の皆様の一層のご活躍をご祈念申し上げ、講評とさせていただきます。

来年は是非「奈良」の地で再会し、音楽科教育・芸術科音楽教育について熱く語り会いましょう！

ご清聴いただきありがとうございました。

令和７年度　全日本音楽教育研究会全国大会　佐賀大会　中学校部会

◆公開授業レポート◆

日 時 ： 令和７年１０月２３日（木）
会 場 ： 佐賀市立金泉中学校　　佐賀市立城北中学校

大会研究主題　　「育てよう　音楽と豊かに関わる子ども

～音楽科及び芸術科音楽における「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善と
「個別最適な学び」と協働的な学び」の一体的な充実を通して～

【表現・歌唱】第２学年

題材名「曲にふさわしい表現を創意工夫して混声三部合唱で歌おう」
指導者　佐賀市立金泉中学校　教諭　瀬戸 法子　氏

本時は、山崎朋子作詞作曲「空は今」を教材とし、テクスチュアに着目した表現の創意工夫を行う授業であった。冒頭Aを歌ってこの旋律が「希望のメロディー」であることを確認し、前時のワークシートからA’をどのように歌いたいかという全体の共通イメージを共有した。

そのうえで、各パートの役割や関わりを踏まえて表現を検討し、意見交換や歌い試しを繰り返しながら創意工夫していった。他パートの音源を流して自分たちのパートの声と重ね合わせたり、他のパートのところに移動して音を重ねたりと何回も歌い試し、テクスチュアの変化を意識した表現の創意工夫が見られた。最終的に各パートが創意工夫した点を共有し、自分たちの思いや意図が伝わる合唱表現へと結びつけていた。

研究協議では、授業者がパートリーダーを中心に協働的な学びを促し、テクスチュアに着目して表現の創意工夫につなげていた点が評価された。また助言者からは、ＡとＢのユニゾンによる一体感や、ＣからＡ’、前奏からＡという曲のつながりから考えるとＡＡ’は同じ思いで歌い分けることができないという気付きから、前後関係を踏まえた技能面での歌い分けの重要性が示された。さらに、表現の創意工夫の授業では、最終的に自分たちの思いや意図をもち、自己のイメージや感情と関連付けることができていたかが大切であるとの助言があった。

【表現・器楽】第２学年

題材名　「リコーダーアンサンブルの響きを味わいながら演奏しよう」
指導者　佐賀市立金泉中学校　教諭　多久島　彩花　氏

交響詩「フィンランディア」の中間部の旋律を基として作られた「フィンランディア賛歌」を三声のリコーダーアンサンブル曲として編曲された楽譜を教材とし、本時は、パートの役割を考えながらグループごとに曲にふさわしい器楽表現を創意工夫することをねらいとした授業であった。

第一時で、２声と３声で録音された音源を聴き比べる活動を通して各パートの役割を理解したうえで、難易度の異なるパートを自身で選択したことから、生徒が本題材の学習に無理なく主体的に取り組むことができていた。パートごとの音源を聴きながら何度も個別学習を行うことができる個別最適な学びを保証していたことも、生徒の意欲を喚起することにつながっていた。各声部のバランスが適切でない演奏や、グループで録音した演奏を聴くことで、様々な気付きがあり、生徒の思考を揺さぶっていた場面が印象的であった。また、途中で他のグループの演奏や再度録音した音源を聴くことで、自分たちの演奏と比較し、より課題が明確になり、楽しみながらリコーダーアンサンブルの演奏に取り組む姿があった。

指導講評では、生徒が題材の見通しがついていたことや日頃から緊張感をもって音楽の学習に取り組んでいることのよさを挙げられていた。また、聴く活動により、他人事だったことが自分事になり、さらに主体的に学習に取り組む生徒の変化に、学習への課題が解決され、満足する様子が感じられたとお話しいただいた。本題材に主体的、協働的に取り組もうとしている態度が教師の手立てにより育成された授業であった。

【鑑賞】第３学年

題材名　「私たちが身近に聴き親しんでいる音楽の魅力を探ろう」
指導者　佐賀市立川副中学校　教諭　山口　桂一郎　氏

男性グループのアップテンポの曲（曲Ａ）と女性アーティストの比較的スローな曲（曲Ｂ）の２曲のポピュラー音楽を教材とし、「２曲の音楽の特徴を捉え、それらの音楽の自分にとっての意味や役割を考えよう」が本時の目標であった。音色と速度に焦点化させ、繰り返し比較聴取したうえで、グループで本時の目標に向けて話し合い、全体共有につなげていった。各グループからは、曲Ａはテンポが速く、エレキギターの音色やドラムのリズムと男性の力強い歌声に着目し、「盛り上げたい時」「何かを始める時」「頑張ろうと思う時」に聴きたいという意見、曲Ｂはテンポが遅めでピアノやアコースティックギターの音色と女性の落ち着いた歌声から「いやなことや悲しいことがあった時」「落ち着きたい時」「心を支えたい時」に聴きたいとの意見が出ていた。

研究協議では、授業者から、①普段聞き流している音楽に対し観点をもって聴かせ、考えを引き出そうというねらいで本題材を設定したこと。②「身近な音楽」という生徒へのアンケートでこの２曲があがったこと。③要素として「音色」と「速度」に注目させたことが報告された。

また、参観者からは、生徒全員がポップスというジャンルが好きとは限らない中、教材としてポップスを取り上げる理由、３年間のカリキュラムにおいて、この授業への経緯や位置付けなど、様々な意見や質問があった。

指導講評では、ジャンルにこだわらず、多様な音楽の中で「身近な音楽」を優先し、当初の「ポピュラー」から「身近」に題材名を変えた経緯、好き嫌いはあるにしろ、普段聴いている音楽を丁寧に比較聴取させたことへの評価と助言があった。

【表現・創作】第１学年

題材名「自分が気に入った「佐賀」を旋律で表そう」
指導者　唐津市立厳木中学校　教頭　吉村　真希　氏

創作を行うにあたり、個々の生徒の読譜、記譜等の技能の個人差に対応し、生徒一人ひとりが創意工夫を生かした表現で旋律をつくるために、学習者用端末にインストールした音楽アプリケーション「カトカトーン」を活用した創作授業であった。

郷土佐賀のイメージを子供たちがもちやすいように、佐賀の特徴が撮影された数枚の画像を提示し、ワークシートに記入しながら自分の考えをまとめ、旋律の音高やリズムなど、音楽の諸要素を意識しながら創作活動が進んでいった。学習者用端末を活用することで、自分の表したいイメージを楽器の代用として簡易的に試しながら音色を聴取することができるため、どの生徒も創作する楽しみや醍醐味を速やかに感受している姿が印象的であった。

授業者からは、本時の取組までに「さようなら」と言った簡単な言葉を用いた旋律づくりを行い、創作への足掛かりとし、取組意欲を高めたことや、生徒が創作する際に、自由に創りすぎてしまわないように、課題や条件など枠をあらかじめ設定し、音素材を絞ることなど、授業を行う上での工夫や配慮について説明があった。また、ある程度枠を定めることは、自分の考えを表明するのが厳しい生徒への支援につながることについても話があった。

指導講評では、本授業は単に写真を見て創作するのではなく、写真から掴んだ自分なりのイメージから、どのような音楽を創りたいのか考察し、音の音高やリズムの工夫など音楽的な表現を工夫した上で、再び佐賀の名所にもどる取組がされており、「表したいイメージ」の本質に迫った学びの深い学習活動であるとのお話をいただいた。

◆ワークショップ◆

日　時　：　令和７年10月23日（木）　　１５：００～１６：３０
会　場　：　佐賀市文化会館

１　ボディパーカッション教育の魅力

講師：九州栄養福祉大学　教授　山田　俊之 氏

ご自身のこれまでのご経験や実践を通して、インクルーシブ教育を踏まえたボディパーカッション教育の魅力について学ぶ内容であった。特別支援教育や不登校の対応での集団療法の記録からボディパーカッションの効果について知ることができた。

また、山田先生の様々なエピソードを織り交ぜながら、実際に参加者がボディパーカッション作品の「花火」や「手拍子の花束」を体感することで、明日からの音楽教育の場で実践できるアイディアをたくさんいただくことができた。山田先生の明るさや子どもを引き付ける力を通して、音楽が本来もつ魅力について改めて見つめ直す機会となった。様々な年代の人たちが障害の有無に関係なく、音楽を通してつながっていきたい

という山田先生のお考えに感銘を受けた。音楽の楽しさは人の心を豊かにし、生きる力となることを感じたワークショップであった。

２　音楽をつくるということ～能登復興にかける思い
講師：合唱作曲家　弓削田　健介　氏

合唱作曲家である弓削田健介先生の作品「MUSIC」を先生自らが弾き歌いしながらワークショップが始まった。

そして、音楽を通じて出会った人とのお話や自分自身の夢のお話などを次々と語られ、何曲も弾き歌いされる音楽に魅了された。「歌には作った人が伝えたかったメッセーが隠れている」「心の炎を子どもたちに伝えたい」「今はＡＩがあるが内に秘めた炎を伝えるのは僕たちにしかできない」など、音楽の力は無限大であることを力説された。

最後に能登復興への想いやあらゆる困難に向き合う人への応援歌として作曲された「フェニックス」を会場の皆で合唱し興奮のうちにワークショップを終えた。曲の背景やメッセージを捉える大切さを学び、子どもたちと共にたくさんの音楽と出会い学んでいきたいという思いを再認識する貴重な時間となった。

３　子どもを大切にした音楽科の授業づくり
講師：桐蔭学園小学校主幹教諭　岩井　智宏　氏

授業で大切にしたい６つのこととして、①子どもが好き、②成長を信じる心、③子どもの様子に興味を持つ、④教科への愛情、⑤教材研究、⑥授業デザイン力を挙げられた。このうち①～④は心情的な教師力だが、⑤と⑥が技能的な教師力であり、その技能を磨くことが重要である。「音楽はそのものに力があるので、教師は子どもが楽しんでいると授業をこれでよしとしてしまいがち。楽曲こそが偉大なのであってそれが教師の力とは言えないので、教師は自分に厳しくないといけない。」とお話しいただいた。また、教材研究の視点として、１題材におけるねらいの焦点化、２共通事項の確認、３教材性、４創造的思考への導きが必要であり、それらを踏まえたうえで、子どもが楽しみながら学ぶ工夫が大事である。⑥の授業デザインの視点は、題材構成を念頭において、１はじめとおわり、２流れ、３静と動、４常時活動と本時、５ねらいの焦点化を意識することが大事である。そして、「重要なのは、これらの共通した目的は授業を通した子どもの人間的成長である」との言葉が印象的であった。

ワークショップを通し「かたつむり」「おぼろ月夜」などを教材に、参加者同士による関わり合いや実演を織り交ぜながら、共通事項の確認の仕方や創造的思考への導き、静と動、ねらいの焦点化などを体験するものであった。最後に「ひととひと」を全員で合唱し、岩井氏の「子どもの存在が授業を深めるきっかけになる」という言葉で締めくくられ終了となった。

４　日本伝統音楽の魅力 ～長唄をうたおう
講師　長唄演奏家／長唄三味線方 杵屋 五洲　氏

ワークショップ前半は、長唄演奏家で長唄三味線方である杵屋五洲先生に長唄をご披露いただいた。秋を思わせる花や虫の声、月など秋の風物を詠った「秋色種」と、多摩川の途中の風景や風俗を紹介する歌詞で多摩川の由来を知ることのできる楽曲「多摩川」の２曲であった。地声でまっすぐ力強い講師の声は大変迫力があった。

後半は口伝で長唄を唄う実践的なワークショップであった。「元禄花見踊りより」と「勧進帳より」に挑戦したが、節回しが難しく、参加者は杵屋先生の頭や首の動き、口の動かし方から音を探りながら唄った。江戸時代、元禄年間に地歌から派生した長唄の歴史を感じる時間であった。

５　歌唱教材を魅力的に歌おう
講師：テノール歌手／三重大学教育学部准教授　上ノ坊 航也 氏

オープニングでは、「オー・ソレ・ミオ」と「フニクリ・フニクラ」の独唱が披露され、その圧巻の歌声に一気に引き込まれた。続いて、「歌唱共通教材」の定義についてわかりやすく解説がなされた。これらの教材は、学年や地域を越えて多くの子どもたちが共通して学ぶものであり、音楽文化の継承や感性の育成に重要な役割を果たしていることを再認識した。発声指導についての講義では、「発声練習は目的をもって行うこと」が何よりも大切であると強調された。大きな声が出ない原因は“息が足りない”ことにあると指摘され、声量は声のスピードと息の量によって決まるという理論を、実際のデモンストレーションを交えて示してくださった。笑顔を交えながらの実践は、楽しさの中に学びが詰まっており、参加者一人一人が「歌うことの喜び」を改めて感じる時間となった。

後半は、小学校の共通教材「もみじ」「冬げしき」、中学校の共通教材「浜辺の歌」「花の街」を題材に、歌唱指導のポイントを学んだ。「浜辺の歌」や「花の街」では、それぞれの時代背景や作曲当時のエピソードも紹介され、曲への理解が一層深まった。「花の街」については、平和学習や修学旅行の学びと関連づけて取り上げることができるという提案もあり、教材活用の広がりを実感した。

全ての曲について参加者自身が積極的に歌唱し、感動を体感しながら学ぶという貴重な機会となった。今回の研修を通して、改めて「歌うことは表現であり、感情の共有である」という音楽教育の原点に立ち返ることができた。明日からの授業でも、発声の基礎を大切にしながら、子どもたちが自分の声を好きになり、歌うことの楽しさを感じられるような指導を心がけたい。

６　授業に役立つ指揮法とアナリーゼ
講師：指揮者・佐賀大学教授　今井　治人　氏

課題曲はムソルグスキー作曲　組曲「展覧会の絵」から８曲。次々にアナリーゼしながら各曲の特徴的なポイントを捉えた指揮法をご講義いただいた。

今井氏から示された今回のワークショップの目標は次の３点である。１作品の音楽の内容を理解する　２音楽の内容を表現するための指揮法を考える　３指揮法を指導するときのポイントをつかむ

そして、楽譜を観察して楽器の音を想像しながら考察をし、共有のプロセスを大切にした確かな指揮法を身に付けることが目的として示された。プロから学生、愛好者まで様々な相手に指揮を送り受けとめてもらい、そして返されてくる指揮者には相手に合わせた柔軟性が必要であると述べられていた。具体的な指揮の技術として、アクセントのない部分は時には動きを省くことが効果的であること、休符を小さく振り次にパッと手渡しするような振り方（ひっかけ）によって奏者の反応や楽器のキャラクターが際立つこと、拍子を分割または１つにして振る方法など、齋藤メソッドにも言及しながらアナリーゼから指揮につながる様々なポイントが示された。また、「第１プロムナード」は、曲の途中に完全終止がなく、曲の冒頭から最後までが１フレーズであるという捉え方は、初めて気づかされた受講者も多かった様子で静かなどよめきが起きたのが印象的であった。受講者の中からは３人の方が実際に指揮を振る場面があった。今井先生が示された課題をその場で反映させた指揮ぶりは、普段から指揮を振っていることが伺われる堂々としたものであった。積極的に研修に取り組む姿勢は児童生徒の指導にも必ず生かされることであろう。音楽的な理解を指揮にどう生かしていくか。つまり楽譜から受けとめられることをボディーランゲージで伝え音楽を作っていく指揮者の役割について、興味関心の尽きないあっという間の 90 分であった。

◆記念演奏◆

日 時　：　令和７年１０月２４日（金）　　１１：００～１２：４０

会 場　：　佐賀市文化会館

演 奏　：　ヴァイオリニスト　古澤　巌　氏　　ピアニスト　金益　研二　氏

【演奏曲目】

１．マドリガル	シモオネッティ	作曲
２．ショーロ・インディゴ	佐藤　允彦	作曲
３．銀色のペガサス	金益　研二	作曲
４．ヴィオッティ２２番フィナーレ	ヴィオッティ	作曲
５．ヴォカリーズ	ラフマニノフ	作曲
６．ラ・カンパネラ	パガニーニ	作曲
７．巌組曲より	ダーヴィット・リニカー	作曲
８．愛の賛歌	マルグリット・モノー	作曲
９．チャルダッシュ	モンティ	作曲
10. ニューシネマパラダイス	エンニオ・モリコーネ	作曲

Information

全日音研中学校部会ホームページもぜひご覧ください。　http://zennichionken-jhs.jp/